

# 所報

No.127  
平成31年2月20日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)

URL:http://center.tym.ed.jp/

## 目 次

- 巻頭言 ..... 1
- 各部研修の紹介 ..... 1
- 調査研究事業の概要 ..... 2・3
- センター事業より ..... 3・4
- 随想 ..... 5
- 連載「知って得30」その3 ..... 6

## 巻頭言



富山県教育委員会は、富山大学人間発達科学部との連携の一環として、富山ならではの教員養成のための「とやま学」の講座に、指導主事等 12 名を講師として派遣しています。私も昨年 11 月に「立山の歴史と文化」と題して講義を行ってきました。学生からは、

「私は富山で教員になろうと思っているので、立山という教材を使って授業をするのは、面白そうだと感じた」「私は富山県出身だが立山について知っていることはあまりなかったので、身近な地域の歴史を知ることができるのはよかった」などといった感想が寄せられました。

平成 30 年 6 月付けで閣議決定された第 3 期教育振興基本計画においては、社会の持続的な発展を牽引するための多様な力として、様々な分野でグローバルに活躍できる人材の育成を目標に掲げています。伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度や、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けることが求められています。

富山県では、置県百年を記念して昭和 58 年より富山県高等学校生徒海外派遣事業を実施しており、今年で 36 回目を迎えます。今回、私は団長として、各校から推薦された生徒を引率し 3 月 3 日より 12 日間の予定で、台湾・ベトナムを訪問します。生徒達は、現地の高校生や県内

## グローバル人材の育成

副所長 野口 安嗣

進出企業との交流、ホームステイ等を通して文化や生活習慣、価値観の違いを知り国際協調の大切さを研修します。生徒の中には、「私は、自然豊かで人々の心が温かい富山を誇りに思っています。そんな素晴らしい富山のことをもっと多くの人に知ってもらい訪れてもらいたいと考えています」と志望理由を書いている生徒もおり、異文化を理解し、富山の文化を発信する架け橋になってほしいと期待しています。



大辞林には、グローバルとローカルを合わせた造語として「グローバル」という用語があります。そこで、地域を愛し世界に羽ばたく若者をグローバル人材と名付けました。社会や経済のグローバル化が進展する中、ふるさと富山に心の根をおきながら、探究力や自ら課題を解決する能力、コミュニケーション能力等を備えた世界を舞台に活躍できる人材の育成を目指して、今後とも取り組んでいきたいと思っています。

## 教育研修部



11年次教職員研修(社会体験研修)  
県花総合センターにて  
(10月29日～31日)

## 科学情報部



ICTを活用した授業設計研修会  
タブレットで作成した教材による模擬授業  
(1月16日)

## 教育相談部



第2回適応指導教室担当者研修会  
講演「適応指導教室で社会性と感情を育てる」  
(10月19日)

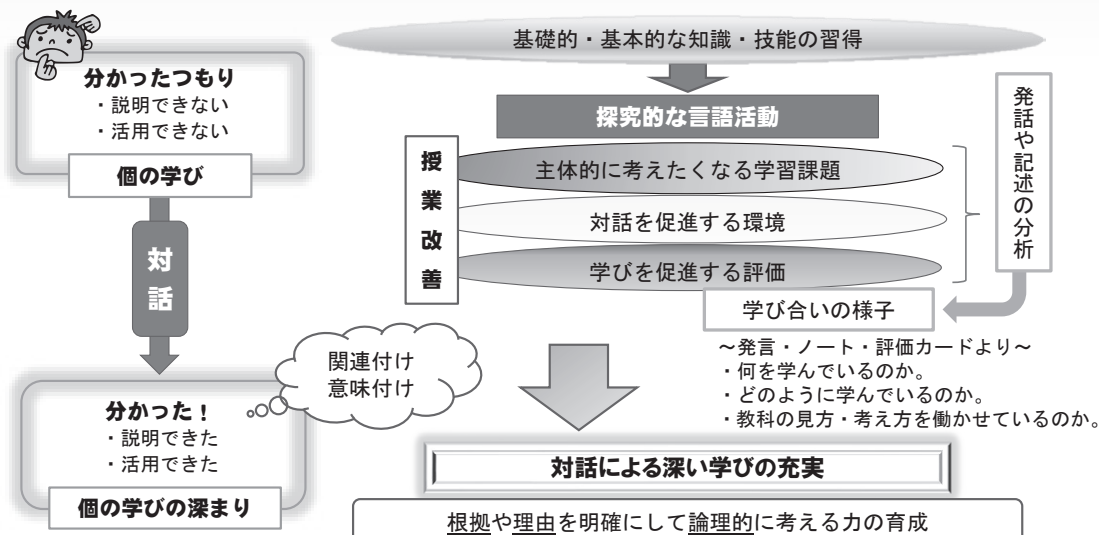
# 平成30年度 調査研究事業の概要



教育研修部

## 「主体的・対話的で深い学び」の充実を図る指導に関する調査研究 — 探究的な言語活動の視点から —

「探究的な言語活動を取り入れた授業改善をすることで、対話による深い学びの充実を図ることができるのではないか」という仮説のもと研究しています。本調査研究では、「対話による深い学びの充実」を「根拠や理由を明確にして論理的に考える力を育成すること」と捉えています。特にペアやグループ等、少人数での対話に焦点を当て、「学習課題」「対話の環境」「評価」の3つの視点で授業改善に取り組んでいます。「友達の考えを聴きたくないような学習課題の工夫」「知識の関連付けや意味付けにつながる対話の場の設定」「対話スキルの育成に有効な評価カード」等の手立てが、個の学びの深まりに有効であることが分かりました。今後も個の学びの深まりに向けて、対話を取り入れた授業改善を進め、学校現場に紹介していきたいと考えます。



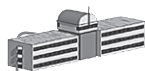
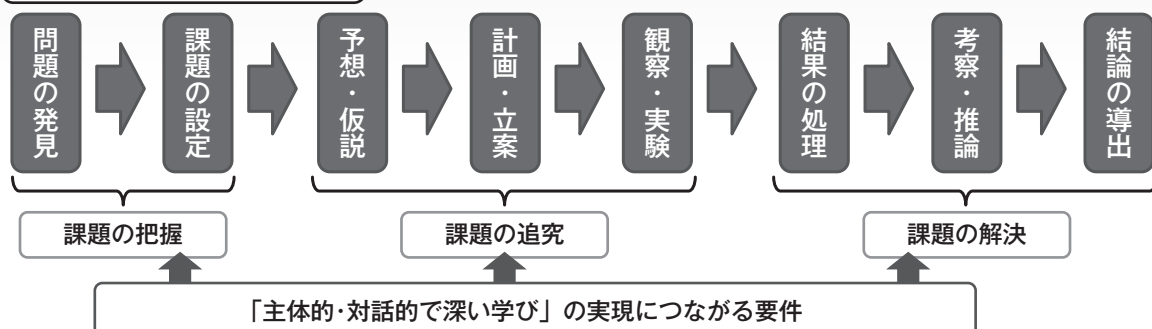
科学情報部

## 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた 学習の在り方に関する調査研究

— 観察・実験における課題解決型学習を活用した理科指導の充実 —

観察・実験を含む課題解決型学習の授業観察から、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる「要件」を作成しました。その「要件」を取り入れた授業実践を行い、児童の学習の質的向上を分析することで、「要件」の効果を検証しました。また、授業改善につながる「要件」を基に行った課題解決型学習の実践事例を紹介します。

### 課題解決型学習の流れ



センター + 研究協力校(小学校)

「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業実践より  
・課題解決型学習を効果的に実施するための要件  
・授業実践で取り入れた要件とその効果  
の観点で整理



これらを実践で活用  
してもらうことで



「主体的・対話的で深い学び」  
の実現に向けた授業改善へ

♡ 教育相談部

## 児童生徒へのチームによる支援の在り方に関する調査研究(2年次)

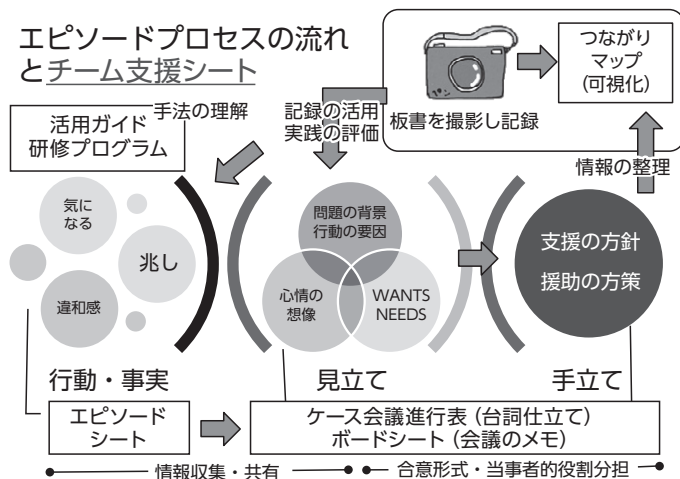
— 日常的・継続的な支援につながるエピソードプロセスの開発 —



困難な状況にある児童生徒への支援として、複数の教職員や専門スタッフによる協働的・機能的なチームによる支援が効果的です。情報共有と合意形成の場であるケース会議がチームによる支援を促進させます。そこで児童生徒理解を深め、援助資源を活かし、支援方針や援助策を検討するケース会議の仕組みとして「エピソードプロセス」(以下、ep)を開発しました。担任が気になるエピソードを基に、多様な視点から行動の背景や要因、心情の想像によって困難の状況を見立て、援助資源を活かしながら役割分担までを約30分間で進めます。epの仕組みに沿って、どの先生にも分かりやすく具体的な手順で進められるよう工夫した「チーム支援シート」を作成しました。研究協力校での実践から、epを用いたケース会議を行うことで、学校のチームによる支援体制づくり及び児童生徒や教職員相互の関わり方により影響があることが分かりました。epは、当教育センターの研修の中で事例検討等の手法として活用するほか、学校支援訪問研修等を通して学校現場への提供を予定しています。

episode process  
イービーと  
呼んでください

### 各「チーム支援シート」の説明



| シートの種類    | 内 容                                                      |
|-----------|----------------------------------------------------------|
| ①エピソードシート | 担任が児童生徒の気になる様子を短いエピソードで書くケース会議の資料                        |
| ②ケース会議進行表 | ケース会議の具体的な手順を台詞仕立ての読み上げマニュアルにした進行表                       |
| ③ボードシート   | 記録用のホワイトボードのレイアウトにそろえた個人用の会議メモ                           |
| ④つながりマップ  | ケース会議の結果を踏まえて、援助者及び児童生徒のできていることやもっているもの、援助者との関係を可視化するマップ |
| ⑤活用ガイド    | epの使い方についてのパンフレット<br>研修プログラムと合わせて日常の実践に活用                |

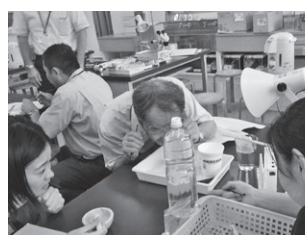
### センター事業より

## 理科実験・観察訪問研修のまとめ

(主管 科学情報部)

小学校の先生方を対象に実施してきた「理科実験・観察訪問研修」も1月中旬で平成30年度の全日程を終えました。本年度は22団体から延べ37テーマに申込がありました。「化学実験の基本操作」「水溶液と金属の反応」「物質の3つのすがた」等、本年度は化学系のテーマに希望が集中したことが特徴として挙げられます。

本年度は延べ569名の先生方が参加されました。参加されたどの先生方も積極的に研修に取り組み、「研修



物のとけ方



電熱線の発熱実験



化学実験の基本操作



物質の3つのすがた

で学んだことを授業実践に取り入れ、これまで以上に効果的に指導することができた」という声も多く聞かれるようになりました。

今後も要望の多い教材、実験器具の基本的な取扱い、教科書と関連する観察・実験の研修項目を充実させ、参加の先生方と共に有意義な研修を進めることができるよう取り組んでいきたいと思っています。

教職員に採用され5年を経過した教諭や養護教諭、栄養教諭及び学校栄養職員を対象とした研修会です。  
今年度実施した計4回の研修内容を一部お知らせします。

### 第1回 (5/24)

講義「教職員の服務と関係法規」と協議「保護者理解・連携」を行いました。

#### 受講者の声

- 法律を守ることは、自分や学校、生徒、そして信頼を守ることにつながる、という言葉が印象に残りました。
- 子供をどう育てていきたいか、卒業後の姿を保護者と共有することが大切だと感じました。



### 第2回 (6/11～10/30)

受講者が一日もしくは半日2回、先輩教職員の勤務校に出向いて直接指導を受ける「先輩に学ぶ研修」を行いました。

#### 受講者の声

- 指導の知識や技術のみならず、見方や考え方についても多くの学びがありました。
- 養護教諭は一人職のため、自分のやり方で日々過ごしていました。今回の研修で児童や保護者、教職員との関わり方、保健室経営の仕方等を学び、すぐに実践していきたいことがたくさん見付けられました。

### 第3回 (7/3)

明治大学の諸富祥彦教授を講師にお迎えし、「人間理解を深めるコミュニケーション」をテーマに講義・演習を行いました。

#### 受講者の声

- 心と心をつなぐことが教師として一番大切なことだと実感しました。子供や保護者、同僚と心をつなぐことのできる教師でありたいと思いました。



### 第4回 (11/13)

総合教育センターの館野智子客員研究主事による講義・演習「不適応児童生徒の理解と対応」と富山大学の和田充紀講師による講義「発達障害の理解と指導の実際」、職種・校種別の研究協議を行いました。

#### 受講者の声

- 問題の背景や要因、本人の思いを考え、整理することで、今まで見ていなかった本人の姿やアプローチの仕方考えることができるようになりました。



平成 29 年度の富山県における不登校児童生徒数は、28 年度と比べ、小学校で大幅に増加し、中学校・高等学校でもやや増加傾向がみられました。

教育相談部では、文部科学省の「いじめ対策・不登校支援等推進事業（学校以外の場における教育機会の確保等に関する調査研究）」を受け、市町教育センター・適応指導教室と連携をとりながら、不登校児童生徒の自立を支援する事業を実施しています。その一つがアウトリーチ型支援です。これは、様々な理由から適応指導教室にも通級できない児童生徒に対して、訪問指導員が家庭に出向いて支援するものです。

今年度は、県総合教育センターの広域訪問指導員の他に、五つの市町（滑川市、上市町、射水市、氷見市、南砺市）で地域訪問指導員が家庭訪問をしています。市町教育センターが連絡調整を図ることで、タイムリーかつ継続的な支援が可能になりました。訪問指導員が対象児童生徒宅を訪問して、本人の話を聞いたり、一緒に遊んだりして心を軽くします。また、学習を支援したり、適応指導教室への通級につないだりします。さらに、学校との情報交換を行うなど、学校復帰に向けた支援も行います。訪問指導員は、一人一人のニーズに細かく対応し、親身に取り組んでいます。

そのかいがあって、市町教育センターから、以下のような報告が届くようになりました。  
「Aさんは、順調に適応指導教室に来られるようになってきました」  
「Bさんは、玄関まで出て来てくれるようになりました。地道に支援を継続していきます」  
「新しく要望があったので、来月からCさん宅の訪問を始めます」  
これからも、一人一人の歩みに寄り添いながら支援を届けていきます。





## 訓練は悪いのか

学力向上アドバイザー 吉江 友秋

世の中全体がにぎやかで、言葉があふれている。店の売り場では、本日のお買い得商品の宣伝アナウンスが聞こえてくる。家に帰りテレビをつければ、いつも誰かが話をしている。私たちの生活の中に人の言葉が洪水のようにあふれている。

しかもほとんど、心静かにして人の話を聞く必要感がないことの方が多い。宣伝アナウンスを無視して人と話をしても、アナウンサーがニュースを伝えているときに、気にせずにスマホをいじっていても困ることは滅多にない。

こんな環境の中で成長していく子供たちは、それが当然だと思っている。子供たちだけではない。授業参観中もおしゃべりを続ける保護者に悩まされた教員も多いだろう。成人式を妨害して逮捕された新成人が、「騒いで目立ちたかっただけ、こんな事件になるとは思わなかった」と。

「時と場に応じて、静かに人の話を聞きなさい」というしつけが家庭で徹底しているとは思えない。大半

の子供たちにとって、着席して、静かに人の話を聞くという訓練・経験は、小学校入学後となる。

「手はおひざ、背中はびん、おなかと机にグーひとつ」「口(くち)チャック」等の合い言葉が、1年生担任の使用頻度の高い訓練・指示用語となっている。

「授業中に騒ぐと周りの人の迷惑になります。だから静かにしましょう」と注意するだけでよいなら、小1プロブレムや学級崩壊など起こりはしない。教えることは教え、実際に行動させて、できたことを認め、それが身に付くまで根気よくこの訓練を続ける担任に感謝したい。

相手の話をしっかり「聞く力」は、コミュニケーション能力の基盤であり、場をわきまえて静かにすることは社会のマナーである。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」とはよく言ったものだ。人の話を「聞く力」を大切にするなら訓練も悪くない。



## 列車の中の親子

教育相談部長 戸島 宏之

ある日の夕方、列車内での話です。車内は、高校生と会社員で満席でした。ほとんどがスマホを忙しそうに操作しています。そんな中、一組の親子に目がとまりました。オニギリをおいしそうに食べている男の子と、外国出身と思われるお父さん。二人は声を出さないようにして、時折、目を合わせては、「オニギリおいしいヨ」「いい子にできてエライね」と対話しているように見えました。

国立青少年教育振興機構が、平成30年7月に「インターネット社会の親子関係に関する意識調査(日本・米国・中国・韓国の小中学生が対象)」の結果を発表しました。「家族が一緒にいても、それぞれがスマートフォンを操作している」という質問に「よくある」「たまにある」と回答した割合は、日本人の小中学生ともに約6割と、4カ国の中で最も高かったそうです。また、「親は携帯電話やスマートフォンを使用しながら私と話す」ことが「よくある」と回答した者ほど、親と話すのが「とても好き」「親と一緒にいるのが好きだ」

と回答した割合が低かったそうです。

「この車内の日本人の光景を、外国の方はどんな風に見ているのだろう」と考えていたら、くだんの親子が降車していきました。そのときです。急いで降りようとした少年の肩を父親がグイとつかみました。女性を先に降ろすためでした。日々の生活の中で躰をしている父親に驚かされました。また、それに素直に従う子供を見て、すてきな親子だなあと感心もしました。

最近の情報機器の普及には目を見張るものがあります。私も家族との連絡にメールを使うことが習慣になっています。この親子からは、顔と顔を合わせたコミュニケーションの大切さと家族の在り方を考えるきっかけをもらったような気がしました。

「家に帰ったら、娘に話しかけてみようかな。何がいいだろう?」、列車の中でそんなことを考えながら、家路に着きました。



理科の  
ちょっといい話

## アンモナイト

科学情報部 研究主事 尾島 賢治

化石でよく知られるアンモナイトについてご存知ですか？

アンモナイトは軟体動物の頭足類なのでイカやタコの仲間です。今から4億年以上前に出現し、約6500万年前に絶滅しました。この間、1万種類あまりが出現し、世界中の海で繁栄しました。生きていた年代の幅が狭いため、アンモナイトが見つかった地層の時代を特定する化石（示準化石）としても有名です。日本でも、北海道が国内最大のアンモナイト化石の産地となっています。

アンモナイトの体の軟体部は細菌等によって分解されたため、ほとんど残っていません。しかし、殻の部分は炭酸カルシウムなので化石化して残るため、写真1のようなものをよく目にするでしょう。殻の部分があまりにも有名なので、軟体部も含めてどのような生物であったかの認知度は低いようです。実は現存するオウムガイと系統的に近いので、そこから写真2のようなものと推定されています。



写真1 アンモナイトの化石



写真2 アンモナイトの想像模型

オウムガイとは殻の中のつくりが似ています。アンモナイトを半分に切断すると、巻いている殻の中は隔壁という壁によって小部屋（気室）に分かれています。これと同じつくりを、写真3のようにオウムガイでも見るができます。この気室で浮力のバランスをとっています。ちなみに、科学情報部では、アンモナイトの化石を削って縦断面を露出させ、この気室等を観察するプログラムも行っています。



写真3 オウムガイの切断面



写真4 曲がったパイプ形のアンモナイト

殻の部分の形は、写真1のようなものが有名なのですが、狭い期間に様々な進化を経た結果、殻の巻きも様々なものがありました。縦にらせん状に伸びたもの、トロンボーンのパイプのような形のもの（写真4）、一見不規則でごちゃごちゃになっている感じのもの等。

有名すぎてあまり取り上げられないことのないアンモナイト。意外と知らないことが多いようです。一度インターネットで「アンモナイト」と検索してみてもいいかがでしょうか。

## 教育相談

連載

## 居場所ありますか？

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

相談に来ている中3男子の母と話した時のこと。新年を迎え、学校で「今年の一文字」を書いたそうです。彼が選んだ文字は、「場」。「みんな行く場所が変わっていくから、みんなも自分も変わる。場所を変えて、気分も変える」という気持ちで込められています。

社会心理学でいう「場の理論」を思い出しました。人間の行動は、個人の性格や能力だけでなく、置かれた場、つまり物理的・心理的環境と相互に関連し合うというものです。集団における人間行動を理解するための一つの枠組みとされています。

例えば、あなたが多店舗展開のコンビニで働いているとします。あなたには接客の素質があり、職場環境もよく、意欲的に仕事に取り組んでいました。その後、別の店に異動になりました。そこでは、「言われたことをやればよい。従来通りにやるのが大切」という価値観の人が大多数でした。同時に、右へならえといった同調圧力が強い文化もありました。このような状況に置かれた場合、あなたは「前例はないけど、お客さまが望んでいる通りにします」と言えるでしょうか。ちょっと難しいかもしれません。

カウンセリングでも「場」を大切にします。クライアントが主体的に問題を解決していくための場を設定し、その枠組みの中で具体的な内容を話し合います。話すには、話せる関係が前提になることは日常のやり取りでも同じだと思います。それほど信頼していない大人に、「何か悩んでいるの？」と尋ねられても、子どもは「別に」と答えるだけでしょう。話しやすい雰囲気があって初めて、話そうという気持ちになります。一人だと逃げたくなるような問題に向き合うために、クライアントを守り支える場、言い換えれば、関係性を整える必要があります。何もしなくても、場さえあれば解決することすらあるのです。

春になったら、中3男子が自分らしく過ごせる場所に出会えますように。

